

子どもの造形的発想について(2)

林 健 造

▽発想ということ

一月号では、「子どもの造形」について主として造形各領域における子どもの造形活動を中心に述べた。この号はとくに子どもの造形的な発想について述べていきたいと思う。

発想などということばは、ちょっと耳なれないことばであるが、近頃デザインではよく使用される。これと似たことばでは、構想・アイデア、思いつきなどがあげられる。要するに、何を、どんなふうに描こうとか、作ろうとかというアイデアを成立させることなのである。

いわば発想は造形の出発点ともいべきもので、この出発が間違っていると、その上にいくら築きあげてもむだであり、よい結果をうみだすことはできない。したがって、今日デザインの世界

で、手ぎわよく作るという技巧よりは、より発想を重視されるのは、このことに外ならない。

ところで幼児の場合などを考えてみると、このようなデザインでいって、このような計画的思考が働いているとは思えない。といって、子どもの発想が全然無いかというとそうではない。

いかにも子どもらしい、あるいは子どもでなければ生まれてこないような発想がある。これをよく見わけて、とりたてて、大いに激賞してやることが、創造的な造形を育していくポイントなのである。

▽発想の基盤

発想の基盤となるもののうち、最も大きな力は創造力であろう。人間が生まれながらにして創造力があるということに異論の

ある心理学の立場もあるが、それにしても、創造力の萌芽までを否定してはいない。もしも人間の能力の中にこのようなものがないとするならば教育するというようなこと自体も否定されなければならぬ。

「誰も、空家だと知つてドアをノックするものはないだろう。」
ということばは、この間の事情をたくみに比喩している。
次には、創造力の源泉ともいべき想像力(イマジネーション)であろうし、そのまま想像力をそだてるものとなる認識とか観察とかいうものが根底になつてゐることもいなめないであろう。

このよう見ること——想像力——創造力といふ一貫された基礎体系とともに、子ども自身の心理的世界としての、機能的快樂——あそび——材料体験という体系もたしかに発想の重要な基盤になつてゐるといえよう。

すなわち、機能的快樂とは、幼児にみられるあそびの姿で、無目的で、ただ積木をつむこととくずすこと、紙をやぶくこと、穴を開けること自体を喜んでいる姿をいう。したがつてこれは一面材料体験でもあるわけで、粘土で製作するのに、ものを作るといふことよりも、粘土をべたんべたんと板の上にたたきつけてみたり、手でちぎった粘土を床に投げて、くつつくことを楽しんでいたりすることがままあるが、これなどは、粘土の展性や粘着性という特質をあそびの中で理解していることに外ならない。このよ

うに肉体を通じ、体感として感得した経験は、きっと次の造形経験をする上の発想として生かされてくることは当然である。

また、同様に、アニミズムや子どもの用（機能）ということも基盤になるであろう。

たとえば、おままでとをしていても、木の葉にごちそうをのせるとすぐおちてしまつたりすることから、木の葉をまるめたり、ビンの口金を器物にすることを考えつくなどは、器物の機能を考えていることである。

ルネッサンスのレオナルド・ダ・ヴィンチが、壁のしみから、造形的なイメージを発見したことは有名な話であるが、彼はまた、飛行機の最初の発明家でもあつた。おそらく、空を飛びたいという人間の憧憬は誰ももつていたに違ひないが、彼はそれを、まず鳥の形からヒントをえて、人間の体に翼をつけたらきっと飛べるに違ひないと考えた。この発想などは、まったく子どもの発想とそぞう變りはない。今日のすばらしい航空機の発達もこんなところに出発点があつたと考えると、子どもの小さな発想でも実際に宝石のような輝きをもつていることを改めてみなおす必要があるのではないかろうか。

▽ 子どもの発想の実際

(A) イメージ探し

流れる雲、水のしみ、河原の石、それから木目などをじつとみてみると、それが狼の顔にみえたり、兎にみえたりすることは誰もが経験していることである。

おとなでも汽車の窓のくもりの形などから、いくつイメージを発見したかを競うイメージ探しをしたりすることは、車中の退屈しのぎになつて楽しいものである。

アニミズムの段階の子どもの場合など、それがもつと真実感をもつていて、御手洗いとドアの木目がどうしてもこわい怪物が大きな口を開けているようにみえてこわい、などという例がよくある。このイメージ探しは、実は子どもの造形の発想になつていることが多い。新聞紙をまるめたら、あひるさんだとか、お魚だとかいう形の連想の早さは、おとのん比ではない。雨ふりの日に水溜りにおとした紙をべそをかきながら拾つてみたら、そのよごれが、かにさんにしていて、

「おもしろいな、かにさんがいるよ。」といつて、わざわざみせにきた子どももいた。

このような「なーんにみえる」といった遊びは、幼児の場合大いに経験させ、育てていきたい感覚である。

(B) 三本の刀とポスターの話

小学校の先生をしている友人のA君の話である。「子どもにお話をつくらせるとおもしろいよ。」という。一年生の子であるが、

おばあさんたちがモモを二つに切つたら中から桃太郎がうまれましたって、桃太郎もきられちゃうから、きろうと思つたらがいいな。それから桃太郎さんは刀を三本もつてでかけました。もしかして犬とあつたら一本やります。猿ときじにもやるので三本もつていくのです。」

実際に愉快な近頃の一年生らしい発想の桃太郎のお話である。子どもにおとぎ話を翻訳させることなど、成程考へてもみなかつたが、大切な意味をもつてゐるようである。開高健の「禪をしめてチヨンマゲを結つている裸の王様」も子どもの発想の眞実であろう。次のポスターの話は、夏のラジオ体操で出席表のようなものにハンコをついてもらうことはどこの学校でもしているし、子どもも楽しみにしている。このハンコが象やベンギンや馬や花の形をしているものを使つたのだが、もらいにくる子どもたちの中には、象だけおしてもらう子や、象、ベンギン、馬、花と美しく交互に並べることを楽しんでいる子もある。ところがベンギンが一番人気があつて、それを押す当番の子の前は大繁盛だが馬は人気がなくその当番の子はがっかりしていたという。ところでその翌日は一策を案じて、自分の机の前に『馬の大安売り』とポスターをだしたという話である。

この話などは、まったく子どもの発想と、ポスターの機能性とがよく自然に結びついている好例である。

(C) 象をつなぐ

一年生に入つてまもない子どもたちに画用紙でおりをつくつて、そこに好きな動物を入れる製作（工作）をしたことがある。みんなは、にわとりを入れてにわとり小屋にしたり、ライオンを入れて動物園のおりにしたりして楽しい一時間を終えた。

ところがお帰りの時、男の子がひとり私のへやに心配そうに入つてきて「先生、何かひもちょうだい。」という。どうしたのかなと思つて、「はい、これをあげましょ。」とひもをあたえると、「ぼくのさつきの象さんかして。」といふ。どうするのかとみているとき、象の鼻をそのひもでゆわえている。そしてさも安心したように、「これでいいや、さよなら。」といいながら、にこにこしてかけだしていく。つないでおかないと象さんがにげていつちやうかもしないと思ったのだろう。実際にほほえましい姿だったし、これも子どもらしい発想の一つである。

(D) 窓のあく絵

子どもは誰ものつていらない自動車や電車を描くことがある。そんなとき教師は「こんなにきれいな、すばらしい自動車なのに、どうして誰ものつていないのかな、故障したのかしら。」などと問題を投げかけていく指導のテクニックがある。

私にこういわれた子どもがいうのである。

「ね、ケーブルカーははしってているとき窓をしめておくのよ。ほ

らね、窓を開けると、お客様みんな乗つてゐるでしょ。」

なるほど彼女のケーブルカーの絵は、窓が半分きりこんであって、それをひらくと中に人がいるようにかいだ紙を裏から別にはりつけてあるといったもので、さすがにこの子どものすばらしい発想には教師の私の方がかぶとを脱がざるをえなかつた。

▽ 子どもの発想を大切に

以上述べたような、子どもから生まれる発想は、子どもとよく話をしたり、子どもと遊んでいればいくらでも発見できる。手袋の指先のほころびからのぞいている指に目鼻をかいて、指人形にして遊んでいたり、自分の手を太陽にすかしてみて血がみえるといつたり、たたんだ紙の内と外に絵をかいてひらくとかわる絵だといつてよろこんでいたりすることはずいぶんある。

このようなことで発見した子どもの発想を教材としてとりあげてみると、子どもと密着した生き生きした教材になることが多い。

しかも、この注意しなければ見失うような子どもの発想を認めてやり大事にそだててやることは、発想がその後の絵や彫刻や、デザインや工作のいずれの分野にも伸展し、よい造形をうみだすための土台である点からも重要なことである。